# ウォルデン池畔におけるヘンリー・ソローの実践と意義
## ―『マヌ法典』、湖沼学的研究、奴隷制廃止運動―

# HENRY THOREAU's Practices by the Shore of Walden Pond and its Significance: *The Code of Manu*, Limnological Research and the Anti-Slavery Movement

山田 正雄
YAMADA Masao

---

***Abstract:*** In this paper, I have tried to clarify the "significance" of Thoreau's "self-realizations," by examining various aspects of them, based on his experimental way of living along the shore of Walden Pond. Beginning after his graduation from Harvard College in 1837, for a period of 10 years until 1847, Thoreau lived deeply and intensely at Walden Pond in accordance with a code of living in the "Code of Manu." The purpose of this experiment was to examine and better understand his "Self."

First of all, in the course of his "search for self" by the shore of Walden Pond, Thoreau found himself becoming harmonized with Nature and experienced the eternal quality of Self. He describes having recognized the importance of the harmonization of Eastern and Western thought. Secondly, through his limnological studies, Thoreau recognized Nature as an organic system and he accused civilization as being a destroyer of Nature; Thoreau took pains to convey the importance of conservation of the natural environment to his contemporaries. Thirdly, based on his stance of sympathy with the Anti-Slavery movement, Thoreau refused to pay taxes, hoping, thereby, to bring about idealistic reforms in the existing U.S. and Massa-
chusetts State governments. His efforts were, generally, aimed at achieving an ideal democratic way of living for all citizens.

Thoreau appears to have achieved progress towards ultimate Self-Realization, and, there-
by to have reached a spiritual place more elevated than that of his contemporaries. Thus, there is a profound significance in Thoreau's practices: he not only discovered the secrets of how to live vividly along the shores of Walden Pond, but, by putting his ideas and

experiences into words, he manages to share something of his deep life with modern day readers.

***Key Words:*** Thoreau, Walden Pond, *The Code of Manu*, limnology, anti-slavery movement, harmony of Eastern and Western thoughts, conservation of the natural environment, democracy

## Ⅰ.コンコードの精神風土

**コンコード地域社会** コンコードは、歴史的にはマサチューセッツ湾植民地(1630)として建設された時代まで遡ると、Puritanism の精神的伝統が色濃く浸透した小村であるだけでなく、レキシントンとともに、アメリカ独立戦争(1775)の火蓋が切られた North Bridge 付近の古戦場やエマスン(Ralph W. Emerson,1803-82)、ソロー(Henry D. Thoreau, 1817-62)、ホーソーン(Nathaniel Hawthorne,1804-64) たちの住居 The Old Manse, The Colonial Inn, Wayside House や Concord Academy など歴史的建造物や名所旧跡が保存されている牧歌的な雰囲気が漂う穏やかな地域社会である。

**エマスンとコンコード** 代々続いた牧師家系に生育したエマスンは、Unitarian 派のボストン
第二教会の副牧師となるが、新妻エレンの死に起因して牧師職を辞任し、ヨーロッパ訪問の帰国後、1834 年に祖先の郷里コンコード(エマスン家の一代目の祖先 Rev. Peter Bulkeley は、コンコードの初代牧師であった)の Old Manse に移転して『自然論』*Nature* (1836)を著述した。コンコードの森や河川、野や牧場、丘や崖といった変化に富んだ地勢と豊かな自然環境の中で、自然を愛して思索したエマスンは、『自然論』で英独ロマン主義、インド哲学・思想、プラトニズム、ネオプラトニズムなど雑多なイズム・思想を借用し、対応関係の類推、象徴主義、アフォリズムの手法を駆使して自然の存在目的を探求した。彼は、「自然は普遍的精神が個人に語りかけ、個人を普遍的精神に連れ戻す器官である」(E1: 62)とか、「自然の背後に、自然を通して、精神は現存する」(E1: 63)と語って、自然を人間性解放のための創造する神・神の顕現であると説いた (Anderson 37)。これは自然・自我・神の探求を通して創造的に生きるべきことが主張された超絶主義の宣言書であった。

**ソローの学生時代における影響**　ソローの超絶主義との最初の出会いは、彼がエマスンの『自然論』(1836)をハーヴァード大学図書館から借りて読んだ大学 3 年次のときであった。1837 年の春、ソローは再び『自然論』を大学図書館から借りて 2 冊分を白紙ノートに写筆して、そのうち 1 冊を終生自分の蔵書とし、もう 1 冊を学友ウィリアム・アレン (William Allen) に卒業記念品として贈呈した(Harding, Days 60)。従って、『自然論』は、ソローの人生の重要な時期

に現れたので、彼に超絶主義の強い影響を与え、同時に思想的萌芽となる重要な一冊の書物であった。

エマスンの絶大な精神的影響を受けたため、ソローがハーヴァード大学生時代に E･T･チャニング(Edward Tyrell Channing) から受けた影響は見逃されがちである。 しかし、ソローが後年にウォルデン池畔で生活の簡素化を実践して作家の道を開くことができたのは、E･T･チャニングから受けた修辞学的訓練に負うところが大きい。1833 年 8 月 30 日から 1837 年 8 月 30 日までの学生生活で、ソローは 1835 年から 1837 年まで E･T･チャニングの指導の下で学んだ修辞学理論は、ジョージ･キャンベル(George Campbell) の『修辞学理論』(*Philosophy of Rhetoric*)とリチャード･ワットリー(Richard Whately)の『修辞学の本質』(*Elements of Rhetoric*)に基づいていた。ソローはドュガルド･スチュワート(Dugald Stewart) の『人間精神に関する哲学の本質』(*Elements of the Philosophy of Human Mind*) を読んだ(Dillman 12-13)。ソローの言語と観念と著述に関して、E･T･チャニングは、ハーヴァード大学の教授のうちで最も永続的な印象を与えたと言われている(Harding, *Days* 35)。 確かに、言語による観念の組立てと文章構成といった修辞学的訓練は、ソローの文章修業の意味で重要な経験であった。

当時のハーヴァード大学には履修科目として超絶主義はなかったが、スコットランド学派の常識哲学者スチュワートやトマス･リード(Thomas Reid,1710-96) などがあって、これらの哲学者たちはジョン･ロック(John Locke,1632-1704)の当時流行した生得観念の白紙という不知識の理論、特に道徳的価値に関して不適切さを示唆したため、ソローや同時代人を新しく議論された超絶主義哲学へと転向させた(Harding, *Days* 51)。このように、ハーヴァード大学はソローに多数の書物､観念､思想の世界に開眼させ、思想的視野の拡大をもたらした。

## Ⅱ. ソローの自己実現の諸相

大学卒業後の 1837 年の秋からウォルデン池畔の実験生活を終結した 1847 年の秋までの 10 年間は、ソローが独創的な生き方を確立して思想を発展させる重要な期間である。ウォルター･ハーディングの伝記『ヘンリー･ソローの生涯』(*The Days of Henry Thoreau*)に沿って、ソローの人生経験を辿りながら種々の自己実現について検討しよう。

ソローの初期の自己実現は、彼がメロンの収穫を確実にするために丘陵地のあらゆる場所に 100 個の種子を蒔いた後で､更に丘陵地の 60 箇所に苗を植えて偶発的な自然交配による異国風の新種シトロン・メロンを発見したこと、コンコード川やウォルデン池に浮べるために 1833 年の夏に小舟＜ローバー号＞を､また私塾教師時代の夏期休暇中の 2 週間(1839 年 8 月 29 日～9 月 12 日) に兄ジョンとコンコード川とメリマック川の舟旅をするために＜マスケタキッド号＞を作ったことに認められる(Harding, *Days* 31)。このように、ソローがメロン栽培や舟作りの経験から創造する歓びと潜在自我を体現することの意味を学んでいたことは容易に想像できる。

### 1. 鉛筆製造業での自己実現―発明家と企業家精神

ソローは大学卒業後に短期間の学校教師を体験した後、再び就職活動をしたが、不況のため

教職のポストがなかったので、不本意にも 1837 年 9 月下旬から 1838 年 5 月下旬まで父親の鉛筆製造工場で働いた。このとき、19 世紀初期アメリカの鉛筆製造に関する問題解決のために没頭して黒鉛製粉機の発明と鉛筆の芯の品質改良に成功したソローは、自らの経済的独立を遂げただけでなく家業に繁栄をもたらす基盤を固めた。当時のアメリカ鉛筆製造業者は黒鉛と月桂樹の蝋、膠、鯨油の混合物を暖めた糊で圧縮して柔軟な状態にして鉛筆の芯として注入していたが、ソローはドイツの鉛筆製造業者が黒鉛と高品質のババリア産粘土を混ぜて焼くことをハーヴァード大学図書館に収蔵されていたエディンバラ出版の百科事典で調べた。その粘土がニュー・イングランドに定期的に輸入されていることを知って入手した後、ソローは粘土の塊と混合する黒鉛を細かく製粉する機械を発明した(Harding, *Days* 56-57)。

ソローは 1843 年 11 月 17 日に家庭教師を辞めてニュー・ヨーク市スタテン・アイランド(Staten Island)から帰郷した後、1845 年 2 月頃まで再び家業の鉛筆製造業に関する多くの発明と改良を行なった。従来の鉛筆製造法は、鉛筆用木材のヒマラヤ杉を 2 等分し、その両内側を鑿で溝を掘り、そこに糊状の黒鉛を満たし、糊が乾燥する間に両方を膠で接着するものであったが、ソローは黒鉛とババリア(Bavaria) 産粘土の混合物には耐火性があって速く凝固することを実験して突き止め、鉛筆用木材の両内側に芯として焼いた黒鉛を入れる溝を掘る鋸を発明した(Harding, *Days* 157)。更に、鉛筆用木材の筒に黒鉛と粘土の混合物を入れて焼き固めることを考案したため、鉛筆の芯の取り外し作業が不要になった。1 工程を短縮した後、彼は鉛筆の硬い芯と同じ大きさの鉛筆用木材の穴開機を発明し、その木材の筒に芯を挿入したので、鉛筆用木材の 2 分割と接着作業の 2 工程を短縮した。最終的に 1844 年の夏、彼は公式上の粘土含有量を増減して多様な軟硬度の芯をもつ鉛筆製造法を開発し、多様な鉛筆を販売するため、純粋な芯と優れた黒さと先端の強固さの点で稀な品質の製図用鉛筆、あらゆる品質と値段の鉛筆、鉛筆の芯や化学電池の陽極板、赤色と青色の芯の鉛筆を製造したことを宣伝した(Harding, *Days* 158)。

このように、ソローは鉛筆製造業で知識と技術を駆使する発明家精神と鉛筆の販売促進のために宣伝する企業家精神を発揮して成功を収め、家業を New England 屈指の会社に発展させた。重要なことは、彼が鉛筆製造業に没頭してアメリカ鉛筆製造業に技術革新をもたらすと同時に、父親への借金返済の問題を解決することができたという事実である。この成功体験によって、彼は現実の諸問題を実際的に解決する生き方とその後一生継続することになる自己信頼の生き方を学んだ。しかし、彼は鉛筆製造業よりも高次の自己実現を志向したため、繁栄する家業を父親に任せて私塾教師への道を辿った。

## 2. 私塾教師としての自己実現―実用主義教育

ソローは教職を断念することができず、1839 年 2 月 9 日に地方紙『ヨーマン・ガゼット』(*The Yeoman Gazette*) に生徒募集の広告を出して自宅で兄と共同経営の私塾 Concord Academy を開設した。ジョンは英語と基礎数学を、ソローはラテン語、ギリシア語、フランス語、物理学、

博物学を教えた。彼らは換気をするため、従来の 10 分の休憩時間を 30 分に延長して教室の窓を開放するという工夫を実践した(Harding, *Days* 76)。このとき、ソローは兄とともに行動による学習という教育理論、言わばアメリカ教育史上で最初の野外学習を実践した。たとえば、彼らは生徒全員を頻繁に野や森の散歩に連れ出して自然の驚異を印象づける博物学の授業だけでなく、遠足先の土地で生徒にインディアンの歴史を教えるために矢尻、槍の穂、擂粉木、石器などのある場所に連れて行き、インディアンが焚火した痕跡のある炉床の石を鋤で掘って見せる考古学の野外学習を行なった(Harding, *Days* 83)。更に、彼らは生徒を『ヨーマン・ガゼット』の仕事場に連れて行って植字工の活字組みとか、プラット銃砲店では銃の照準規制を見学させた。春になると、彼らは畑を耕して生徒に小さな鋤で苗を植えさせる農業実習を行なった。1840 年の秋、ソローは一式の水準器と地平測角器を購入して測量を履修科目に導入し、数学を活用できるようにするために生徒をフェアーヘブン(Fairhaven) に連れて行って崖の測量実習をさせた(Harding, *Days* 83-84)。

ソローが実践した野外学習の教育理論は、理論的学習よりも行動によって問題を解決する実践重視の体験学習プログラムであった。それは、彼が母校コンコード・センタースクールでの短い教師時代に経験した体罰主義の教育方針とは異なり、生徒が自らの思考と行動によって問題を解決する、言わば彼らの知的および道徳的発展を促す教育理論であった。こうした教育理論を実践して初めて、ソローは母校では展開できなかった理想的な教育理念と教師像を体現できた。

ハーディングによれば、ソロー塾の教育理論はオールコット(Amos B. Alcott,1799-1888)の教育理論よりも刷新的かつ時代を 1 世紀先行するものであった。(“The Thoreau school was a century ahead of its time. The Thoreaus, although many of their innovations were radicalthan those of Alcott, won acceptance and made of their school a considerable and memorable success.” Harding, *Days* 88)。しかし、ソロー塾は高い社会的評価を獲得したにもかかわらず、兄が肺結核を患って教職を退いたので、ソローは不本意にも私塾経営を断念し、1841 年 4 月 1 日に私塾 Concord Academy を閉校してエマスンやオールコットの超絶主義運動すなわちコンコード・ライシーアム(Concord Lyceum) 講演 と機関誌 *The Dial* の寄稿と関わるようになった。

結局、ソローは理想的な教育理論に基づいた教師像を体現して教育における自己実現を達成したが、彼の潜在自我は、後年の Concord Lyceum での講演が示すように、教育の場を私塾から社会に移した成人教育におけるより高次の自己実現を目指す創造的な生き方を志向し、やがて理想的な人生を追求する散文作家ソロー像が出現することになる。

**3. 独居生活における自我探求に向けて―『マヌ法典』の実践** ソローがいかに生きるべきかを真剣に検討したのは、兄 John の死後の 1842 年 1 月から独居生活の準備を開始した 1845 年 3 月までの約 3 年間のことであった。それは彼が家庭教師を辞めてニューヨーク市スタテ

ン・アイランド(Staten Island) から帰郷した後、再び父親の鉛筆製造工場で働いていた時期にあたる。当時、彼は身近な人々の悲劇的な急死、たとえば、1842 年 1 月 11 日の兄ジョンの破傷風による死、同年 1 月 28 日のエマスンの 5 歳の息子ウォルドー・エマスン(Waldo Emerson) の猩紅熱による死、その翌年の学友チャールズ・スターンズ・ホイーラー(Charles Sterns Wheeler) の留学先ドイツでの客死という現実に直面して激しい精神的衝撃を受けていた。

更に不運なことに、ソロー自身も兄の死の前年に心身症と肺結核に罹り不安定な健康状態にあった。それは、("The care of the body is the highest exercise of prudence. If I have brought this weakness on my lungs, I will consider calmly and disinterestedly how the thing came about, that I may find out the truth and render justice." 7, *Journal* 1:221)と 1841 年 2 月 23 日の日記に肺結核の要因を冷静に考え、彼自身を鼓舞する内省的な記事を書いたことから容易に想像できる。やがて、不安から立ち直った彼は、人生を慎重に模索し始めて("It is so true that it [a good book] teaches me better than to read it. I must soon lay it down and commence living on its hint." 7, *Journal* 1:216)と 1841 年 2 月 19 日の日記に書いた。これが知行合一の生き方を実践しようとするソローの決意表明であることは容易に想像できる。こうして、彼は人生について自己省察を始め、実験的な生き方を試みるヴィジョンを思い描き始めることになる。

幸運にも、ソローは 1841 年 4 月 26 日から 43 年春まで下宿していたエマスン家で自我と神が探求されたインド聖典『ヴェーダ』(*The Vedas*) 、『ヴィシュヌ・プラーナ』(*Vishnu Purana*)、『マヌ法典』(*The Code of Manu*) に魅惑されて深く読んだ。これらの古代インド文献すなわちウパニシャット哲学との出会いによって、彼は西洋的な成功の価値基準と東洋人による物質主義への軽蔑だけでなく、西洋文学の何よりも遥かに自身に近い人生哲理を見出した。特に、修行僧のために独居生活、簡素化、精神の清浄化、バラモン、神、献身など 10 項目の厳格な生活規範が記述された『マヌ法典』に深い感銘を受けた彼は、それを「民族の諸経典」("Ethnical Scriptures")と題する選集に収めて『ダイアル』1843 年 1 月号に掲載した。この経験から、ソローは実験生活の計画を具体化したものと推定できる。彼が『マヌ法典』からウォルデン池畔の実験生活を実践する霊感を受けたことはもはや疑問の余地もない。

ソローの本格的な作家修業は、彼がコンコード・ライシーアムの幹事となって講演の原稿を書き始めた時期と重なる。彼はエマスンから頻繁に精神的激励を受けて『ダイアル』に投稿するようになって文学的野心を抱いたが、村人からエマスンの模倣者とみなされて苦悩した。彼が個人的経験に基づいた自我探求の創造的な生き方を著述する独創的な作家になるべきことを自覚したのは、このことに起因するかもしれない。彼は亡き兄の追憶のエッセイを著述したいと願って読書と思索と著述に専念できる書斎を建てる静かな地所を探していた。サンディ池(Sandy Pond) の岸辺の土地売買の契約を交わしていた農夫フリント(Flint) の心変わりのため一方的に破棄された後、ソローはウォルデン池畔の一画にあったエマスンの所有地を借りて独力で小屋を建てた。独居生活の当初、村人の素朴な質問に刺激を受けて、彼は人生を深く生きて聖書のような不朽の名著 [後に『ウォルデン』となる]を著述する決意を固めた。確かなこ

とは、ウォルデン池畔がソローに自然親交、自然研究、思索、著述ができる独居生活の機会を与え、散文作家になる夢を実現する絶好の場所になったという事実である。

ソローが独居生活で貫いた実践的な生き方は、小屋の建築（1844 年 9 月に大工の設計図に基づき父親と自宅の建築に従事した）や生計を維持するための農業、土地測量、塀作り、庭造り、煙突作り、棚箱作りなど独力で行なった仕事に実証されている。特に小屋の建築は、独居生活の実践あるいは『コンコード川とメリマック川での１週間』*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* と『ウォルデン』の著述のための住居兼書斎であったことを思えば、ソローの目標の達成であり、自己実現とみなすことができる。それは最小限の労働によって自然親交、読書、思索、著述、瞑想に充当する最大限の余暇を捻出して自我探求の人生を生きるための、言わば彼の人生哲学としての簡素化を実践可能にする住生活の基盤の確立であった。

ソローが独居生活で人生の本質を追求する求道的な深い生き方を実践したことは、『ウォルデン
』第 2 章「生きた場所と目的」が明らかに物語っている。

> I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practise resignation, unless it was quite necessary. I wanted to live deep and suck out all marrow of life. (2:100-01)

ソローの＜人生の本質的事実＞だけに直面する生き方とは、認識や思惟から独立に＜真実存在するもの＞だけを探求して生きることである。従って、ソローには、自我と自然と神の探求を通して人生の究極目的としての自己実現を達成しようとする意図が認められる。そのため、日常的立場においてさえ、彼は生きることを芸術と同一のものに高めようと追求する姿勢を(“To affect the quality of the day, that is the highest of arts. Every man is tasked to make his life, even in its details, worthy of the contemplation of his most elevated and critical hour.” 2:100)と表現した。

独居生活中のソローの内部には、自我(self)と実在(reality) の探求だけでなく、散文作家を志向する潜在自我の実現を目指す意識が窺える。結論的に言えば、ソローが独居生活において自然親交を絶やさず、ウパニシャット哲学を実践することによって自我探求を推し進め、そこに崇高なものの存在を認識することができたため、永遠に繋がる今という刹那を大切にして生きたことは、『ウォルデン』の記述から容易に想定できる。彼が自然と自我探求を通して神探求へ向かい、人生の究極目的を達成しようとしたことは紛れもない事実である。

## 4. 独居生活における究極的な自己実現―神秘的体験

ソローは独居生活で自我探求を実践したとき、目には見えないものの存在を探求して神秘的合一の体験をした。簡素化と自己放棄を経て、神秘的な意識体験にいたる過程を辿りながら覚醒と啓示体験に触れ、彼の究極的な自己実現について明らかにしたい。

## 見えないものの実在についての信念

ソローが学生時代にエマスンの『自然論』(*Nature*,1836) を通して思想的影響を受けた超絶主義は、ドイツ観念論(German Idealism)、ウパニシャット哲学、プラトニズムおよびネオプラトニズムといった古今東西の雑多な思想構成要素から成る混合思想であった。その思想的特質は、人間の生活領域の表面的な部分だけを説明しうる学問や科学の合理主義に対抗する理想主義、すなわち自我が直観的洞察力(insight) によって見えないものの実在を内面的に探るところにある。確かに、ソローには ("It [Religious life] consists of the belief that there is an unseen order, and that our supreme good lies in harmoniously adjusting ourselves thereto. This belief and this adjustment are the religious attitude in the soul." James 53)というジェイムズの見解と同様の思想的傾向が見られる。

ドイツ観念論哲学は、イギリス哲学者ジョン・ロック(John Locke,1632-1704)の悟性重視の感覚主義哲学に対抗して、18 世紀後半にドイツ哲学者イマヌエル・カント(Immanuel Kant, 1724-1804)によって見えないものの実在を探る人間の認識能力としての超絶的理性が主張されたことに始まる。それが忽ちヨーロッパ全体に波及し、19 世紀イギリス・ロマン派ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)、コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge,1772-1834)、カーライル(Thomas Carlyle,1795-1881)の著作を通して1830年代前半のニュー・イングランドに伝播した。英独ロマン主義(English-German Romanticism) の影響を受けたアメリカ超絶主義者たちは、直観、大霊、道徳的良心、内面的光などの概念用語を盛んに用いるようになった。

ソローは精神を究極的な実在とみなす英独ロマン主義やドイツ観念論だけでなくウパニシャット哲学から特に強い思想的影響を受けた。彼は 1841 年から 43 年春にかけてエマスン家の書斎で深く読んだインド聖典や哲学書によって身近な人々の死による精神的空隙を満たされたため、インド修行僧と同様に、見えないものの実在を探求する求道的な深い生き方を独居生活で実践しようとした。事実、この時期の彼の日記にはインド聖典の読後感が散見される。たとえば、彼は『マヌ法典』に強い共感を抱いて、("The sublime sentences of *Menu* [*Manu*] carry us back to a time when purification and sacrifice and self-devotion had a place in the faith of men, and were not as now a superstition. They contain a subtle and refined philosophy also, such as in these times is not accompanied with so lofty and pure a devotion." 7, *Journal* 1:280)と 1841 年 9 月 2 日の日記に書いた。半年後の 1842 年 3 月 23 日の日記に、彼は("When I look back eastward over the world, it seems to be all in repose. Arabia, Persia, Hindostan are the land of contemplation. Those eastern nations have perfected the luxury of idleness." 7, *Journal* 1:343) と書いて東洋への憧憬の念を表明した。

ソローがウパニシャット哲学に強い精神的共感を抱いたことは、1842 年に『マヌ法典』を選集「民族の諸経典」に収めて『ダイアル』7 月号に掲載したことから明らかである。独創的な作家を目指していたソローは、自我と神の探求方法が記述された『マヌ法典』を絶好の生活規範とみなし、それを実験生活で実践に移してその経験を著述する構想を練り始めた。従って、彼

が実在探求を実践したのは、英独ロマン主義やドイツ観念論に限らず、ウパニシャット哲学の特に『マヌ法典』から受けた思想的影響に基づいている。このことは、『ウォルデン』の根本思想としての独居生活、生活の簡素化、精神の清浄化、より高い法則などの概念用語が『マヌ法典』における概念と同一であることから明らかな事実である。換言すれば、ソローが実験生活で『マヌ法典』から最大の影響を受けたことは、彼がウォルデン池畔の独居生活、生活の簡素化、無為･瞑想、精神の清浄化、沐浴の実践に多くの時間を充当したことに実証されている。更に言えば、彼は＜簡素化＞から＜無欲化＞すなわち禁欲的な意識を抱き、更に＜自己放棄＞・＜自己犠牲＞の傾向を強めながら、＜精神の清浄化＞に到って宗教的感情を経験したものと考えられる。このようなプロセスを経て、ソローが神秘的合一の意識体験によって崇高なものの存在に覚醒して啓示を受けたことは、紛れもなく『マヌ法典』に負っている。

ソローは自身の行動や聖典から受けた刺激、瞑想･観照によって人間の霊性に覚醒した。行動による霊性の覚醒は、彼がウォルデン池畔で小屋を建てるために 1 丁の斧を借りて松の若木を伐採し始めた 1845 年 3 月下旬、池の水底で横たわっている冬眠状態の縞蛇を見て、それと同様に原始的な状態から脱却できない人間も、(“If they should feel the influence of the spring of springs arousing them, they would of necessity rise to a higher and more ethereal life.” 2:45-46)と語ったことが暗示している。

また、聖典『ヴェーダ』から精神的刺激を受けて、ソローは知的な覚醒によって創造的な生き方があることを次のように語った。

> The *Vedas* say, “All intelligences awake with the morning.” Poetry and art, and the fairest and the most memorable of the actions of men, date from such an hour. The millions are awake enough for physical labor; but only one in a million is a awake enough for effective intellectual exertion, only one in a hundred millions to a poetic or divine life. I know of no more encouraging fact than the unquestionable ability of man to elevate his life by a conscious endeavor. It is something to be able to paint a particular picture, or to carve a statue, and so to make a few objects beautiful; but it is far more glorious to carve and paint the very atmosphere and medium through which we look, which morally we can do. (2:99-100)

このように、ソローは日常的に自然を対象として徳性によって彼自身の生活を質的に向上させる生き方を目指したことを説いている。

やがて、ソローはウォルデン池畔の戸外の静寂な森を聖域とみなし、孤独な状態で全感覚を集中すること･瞑想によって宗教的感情を抱き、我知らずのうちに見えないものの実在に覚醒したことを次のように表現した。

> To my imagination it [my house] retained throughout the day more or less of this auroral character, reminding me of a certain house on a mountain which I had visited a year before. This was an airy and unplastered cabin, fit to entertain a traveling god, and where a goddess might trail her garments. The winds which passed over my dwelling were such as sweep over the ridges of mountains, bearing the broken strains, or celestial parts only, of terrestrial music. The morning wind forever blows, the poem of creation is uninterrupted;

> but few are the ears that hear it. Olympus is but the outside of the earth everywhere. (2:94)

ここで、「住居に吹きつける朝風が地上の旋律を途切れ途切れに運ぶか、あるいは天上的な部分だけを運んできた。朝風は永遠に吹き続け、＜創造の詩＞は途絶えることがない」と表現されたことは、ソローの感覚が霊的な刺激を受けていることを示している。ウォルデン池畔の森をオリンポスの神山と比喩的表現を用いたソローは、自然界における神の遍在性すなわち神が宿る神聖な場所とみなし、旅する人間[彼自身]を＜神に喩えて＞神の内在性を説いている。

ソローが自然との関係で抱いた感覚は、ジェイムズが次のように指摘した感覚と同様である。(“It is as if there were in the human consciousness a sense of reality, a feeling of objective presence, a perception of what we may call ‘something there,’ more deep and more general than any of the special and particular ‘senses’ by which the current psychology supposes existent realities to be originally revealed. If this were so, we might suppose the senses to waken our attitudes and conduct as they so habitually do, by first exciting this sense of reality.” James 58)。ジェイムズが指摘するように、ソローは池畔の森の小屋を吹き抜ける朝風によって崇高なものの実在を探るために意識を集中して全感覚を研ぎ澄まし、霊的なものの存在に覚醒したと考えられる。

ジェイムズの言説のように、ソローの＜崇高なものの実在についての感覚＞とは、ユングが説く＜統覚作用＞による＜無意識を経由する直観＞のことである。ユングは、心の中の無意識は意識を包括し、人生に及ぼす＜無意識の影響力＞が意識よりも遥かに大きいことを次のように説いている。

> 意識はあまりにも簡単に無意識の影響に屈してしまって、無意識はしばしば意識的な思考よりも十分に真実で賢い。同じように、無意識的な動機がしばしば意識的な決断よりも優れているということが、それもまさに人生の一大事に関わる場合に、見られる。さらに個人の運命は無意識的な要因に強く左右される。…この固有の性質をもつため、私は直観を＜無意識を経由する知覚＞と定義した。(Jung, 9: 299-300)

無意識とは人間の心の最も内奥の領域のことであり、我々はそのような＜無意識を経由する知覚＞・＜直観的洞察力＞によってのみ自然の霊性を神の啓示として捉えることができる。

ソローは自我と自然と神の探求を試み、自らの内面を映し出す鏡とみなしたウォルデン池を多面的に観察し、深く生きて立派な自画像を描こうとした。ウォルデン池畔は、ソローにとって、自然を友として簡素に生きて崇高なものの存在を探求して気高い生活ができる絶好の空間であった。ソローの自我は、自然から啓示を受けて神を受容する容器であったと解釈することができる。優れた芸術家や宗教家のなかには、人が神を受容する容器のような存在であるいうことは、多くの研究者が説くところである。自然の精神的効用としての人間性回復と人間性解放の思想を説いたソローが自ら魂の高所に到達したことは、我々にこの上もない素晴らしい印象を与えてくれる。

## 5. 湖沼学的研究に見る自己実現―自然環境保護

ソローは幼少期からコンコードの豊かな自然環境の下で自然に対する関心を共有する両親の影響を受け、地域住民に対して多数の博物学の講演が行なわれたコンコード・ライシーアムから知的刺激を受けて成長した。そのため、彼はコンコード・センタースクール時代にはすでに周辺世界に対する関心を育み、コンコード・アカデミー時代を経て、ハーヴァード大学生時代には博物学的な関心を十分に発展させていた。独居生活中の 1847 年の冬、ソローはボストンの採氷業者ヘンリー・チューダー(Henry Tudor) の多数の人夫によるウォルデン池の採氷作業を見て、それが自然に打撃を与えない芳しい事業であるとみなし、やがて池の現象に強い関心を抱いて湖沼学的な観察を始めた。

ソローの湖沼学研究は、ウォルデン池の面積、水深、水温、水質、気温、水位変動、気象観測から魚類、昆虫類、水棲植物および池畔に棲息する鳥類、小動物、植物といった博物学的な観察に及んでいる。ウォルデン池の面積、水深、水温、水質をホワイト池やサンディ池のそれらと比較した彼は、ウォルデン池をコンコードで最善の池であると絶賛し、やがてそこに棲息する多様な生物間の連鎖関係の存在とその相互関係のバランスに注目し、個別の生物と生物全体が構成する有機的組織体としての自然環境、言わば生態系の存在について意識するようになった。生態学的な意識による視野の拡大によって、彼はすべての生物が平等の関係にあり、なおも一つの有機的な組織体を構成しているという自然観を抱いた。ソローが多種多様な生物によって構成された自然環境には有機的な連鎖性が存在するという生態学的な意識を抱いたのは、『バガヴァット・ギーター』(*Bhagavad Gītā*) や『マヌ法典』言わばウパニシャット哲学の汎神論的自然観に基づいている。それには、特に、前者の第 5 章第 18 節と第 19 節が示すように、「学識と謙譲を備えたバラモン、牛、象、犬、賤民、これらを賢者は平等に見る。その心が平等のうちに安らう者は、この世においてすでに輪廻(Transmigration) すなわち迷いの生死を限りなく重ねることを克服している。何故なら、ブラフマン(Brahman, Brahma) には欠陥がなく平等であり、従って彼らはブラフマンに安立しているから」と言及されている(長尾雅人, 宇野惇 164)。

しかし、樵によって伐採されて、愛するウォルデン池畔の森の景観が荒廃しているという現実に直面したソローは、自然環境の破壊に危機感を抱き、次のように義憤を吐露せずにはいられなかった。

> But since I left those shores the woodchoppers have still further laid them waste, and now for many a year there will be no more rambling through the aisles of the wood, with occasional vistas through which you see the water. How can you expect the birds to sing when their groves are cut down? (2:213)

これは 19 世紀初頭から中期にかけて繁栄の道を辿りつつあったアメリカ物質文明の悪弊に向けたソローの義憤である。彼が危惧したのは、樹木の伐採による森の破壊をウォルデン池畔の景観の荒廃だけでなく、鳥類や小動物の剥離という意味での自然環境破壊をもたらす深刻な問

題とみなしたからである。それは、ソローにとって、森の所有権とか利益追求のレヴェルを越えて、池畔と森に棲息する植物、鳥類、昆虫類、爬虫類、哺乳類などのあらゆる種類の生物の生存と気象に重大な影響を及ぼす自然環境レヴェルの問題であった。そのため、ソローは文明の進歩と物質的利益のみを追求する自然破壊者たちを次のように告発せずにはいられなかった。

> Now the trunks of trees on the bottom, and the old log canoe, and the dark surrounding woods, are gone, and the villagers, who scarcely know where it lies, instead of going to the pond to bathe or drink, are thinking to bring its water, which should be as sacred as the Ganges at least, to the village in a pipe, to wash their dishes with! That devilish Iron Horse, whose ear-rending neigh is heard throughout the town, has muddied the Boiling Spring with his foot, and he it is that has browsed off all the woods on Walden shore. (2:213-14)

このように、ソローはウォルデンの池水をパイプで引いて私物化しようと企む強欲な村人、ボイリング・スプリング(Boiling Spring)の水を汚濁させたり、ウォルデンの森の若葉に打撃を与えたりする鉄道を告発している。このような苦渋に満ちたソローの言明は、物質的利益や利便性を追求して自然環境を破壊する文明と同時代人に対する批判であると同時に、彼自身の自然環境保護の立場を明示している。

ウォルデン池畔の自然環境を破壊する文明社会を告発した後、ソローは森が再生する兆候を見て歓び、彼自らの想像力によってウォルデン池を浄化して本来の姿を取り戻しつつある芳しい様子と同時に、彼自身の思想が以前の池の様子と同様に再び甦りつつある心境について次のように語った。

> Why, here is Walden, the same woodland lake that I discovered so many years ago; where a forest was cut down last winter another is springing up by its shore as lustily as ever; the same thought is welling up to its surface that was then; it is the same liquid joy and happiness to itself and its Maker, ay, and it may be to me. It is the work of a brave man surely, in whom there was no guile! He rounded this water with his hand, deepened and clarified it in his thought, and in his will bequeathed it to Concord. (2:214-15)

このように、ソローの従来の文学的な自然研究は、博物学、湖沼学、生態学的な事実重視の科学的傾向を帯び、自然環境保護へと発展を遂げた。それは科学的事実に基づいた自然探求という意味において超絶主義の思想的基盤に基づいた行動であり、無論ソローの思想的発展として解釈されるべきである。それはまた、文明社会に対して抗議するだけでなく、自然環境保護の重要性を説いて同時代人を啓蒙しようとするソローの潜在自我の実現である。

## 6. 社会政治における自己実現―民主主義の理想の追求

ブレイ・ハモンド(Bray Hammond) によると、1830 年代と 40 年代アメリカは狭量、専制的かつ無法なジャクソニアン・デモクラシー(Jacksonian democracy)が浸透した時代であった(Hammond 416-17)。また 1839 年の新聞記事は、「読者にはジャクソニアン・デモクラシーの幻影を追求するために私が今まで払ってきた犠牲を理解して頂けるであろう」と報じている。(1) こうした時代に、ソローは 1847 年 7 月下旬に国家に抵抗して納税拒否を実行し、一夜の入獄

体験に基づいた論文「市民の反抗」(“Civil Disobedience”)を書いた。奴隷制を維持しメキシコ侵略(1846-48)という合衆国政府の不正を厳しく弾劾したこの社会政治論文は、ソローが 1848 年 1 月 26 日にコンコード・ライシーアムで「政府との関係における個人の権利と義務」(“The Rights and Duties of the Individual in Relation to Government”)と題して発表した講演である。それは翌年にエリザベス・ピーボディ女史(Elizabeth Peabody) によって「市民政府に対する反抗」(“Resistance to the Civil Government”)と改題されて『美学誌』(*Aesthetic Papers,*1849)に掲載され、後に現在の「市民の反抗」(“Civil Disobedience” 1849) と改題された。政府の在り方と政府に対する市民の在り方を問うと同時に、民主主義の在るべき姿が追求されたこの論文は、ソローの理想主義の立場を示すものである。

冒頭に掲げられた (“That government is best which governs least.”4:356)という言葉が象徴的に物語っているように、ソローはこの論文で現存政府を市民に貢献しない便宜主義政府、正義と良心に基づかない多数者支配の民主主義、奴隷制を存続させメキシコを侵略する専制的政府として批判した。彼は合衆国政府と市民社会の関係および両者の在り方を建国理念に照らして検討しながら、民主主義社会の在るべき姿と理想的な国家像を主張したのである。

ソローは個人の権利と義務の観点から、多数者支配が政府に及ぼす専制的な影響力に注目し、市民の政治的関心と良心を覚醒させるため、(“Only his vote can hasten the abolition of slavery who asserts his own freedom by his vote.” 4:364)と説いた。このような彼の主張は、ジャン・ジャック・ルソー(Jean Jacques Rousseau,1712-78) も言うように、政治に無関心な市民は自らの人権を放棄することになる、すなわち「自分の自由の放棄は、人間の資格、諸権利、義務の放棄である」(ルソー 237)と説いた社会契約論の流れを汲んでいる。

ソローの納税拒否の意図は、奴隷制を維持し外国を侵略する合衆国政府の不正な在り方を批判するだけでなく、市民を覚醒させることにあった。重要なことは、民主国家アメリカの建国理念としての自由と平等の精神を市民に想起させるため、ソローが合衆国憲法の基盤としての独立宣言書における人間の自然権、言わば自明の真理として明文化された、統治者と被統治者に関する条文に照らして現存政府の不当性を説いたという事実である。

> When a sixth of the population of a nation which has undertaken to be the refuge of liberty are slaves, and a whole country is unjustly overrun and conquered by a foreign army, and subjected to military law, I think that it is not too soon for honest men to rebel and revolutionize. What makes this duty the more urgent is the fact that the country so overrun is not our own, but ours is the invading army. (4:361)

このように、奴隷人口が総人口の約 17%、合衆国のメキシコ侵略、軍政による国家支配などの点を指摘したソローの言明は、政府との関係において国民の人権が明記された独立宣言書の次のような理念と一致している。

> We hold these truths to be self-evident: that all men are created equal; that they are endowed by their Creator with inherent and unalienable rights; that among these are life,

> liberty, and the pursuit of happiness; that to secure these rights, governments are instituted among men, deriving their just powers from the consent of the governed; that whenever any form of government becomes destructive of these ends, it is the right of the people to alter or to abolish it, and to institute new government. (Jefferson 13)

確かに、("It is their right, it is their duty, to throw off such a Government [despotic government]." Jefferson 14) と独立宣言書に明記されている。これと同様の観点から、ソローは ("All men recognize the right of revolution; that is, the right to refuse allegiance to, and to resist, the government, when its tyranny or its inefficiency are great and unendurable." 4: 360)と説いた。このように、Jeffersonian Democracy に基づいたソローの政治思想は、悪法に従うよりも牢獄に入る勇気と苦痛によって市民の反抗する良心を覚醒し、その反抗を通して法廷や牢獄を満たすことによって専制的な政府を妨害し、攻撃的な法律に対する抵抗を達成すべきであるという抵抗思想である。この抵抗思想の原点は、("I think that we should be men first, and subjects afterward." 4:358)というソローの人間中心主義の持説にある。「市民の反抗」は、法律よりも高次の、言わば人間の良心の法、すなわち市民の権威の声よりも人間の内なる神の声に従う義務があるという超絶主義の思想的基盤に基づいた講演である。

ソローは、講演の最終箇所で、理想的な国家像の出現を期待する展望を次のように述べた。

> There will never be a really free and enlightened State until the State comes to recognize the individual as a higher and independent power, from which all its own power and authority are derived, and treats him accordingly. I please myself with imagining a State at last which can afford to be just to all men, and to treat the individual with respect as a neighbor; which even would not think it inconsistent with its own repose if a few were to live aloof from it, not meddling with it, nor embraced by it, who fulfilled all the duties of neighbors and fellow-men. (4:387)

かつて建国の父祖ジェファスンらが万人の自由と平等という民主国家の理念を探求したように、ソローは真の民主国家とは個人を保護しても干渉すべきではないという見解を主張した。このような観点から、「市民の反抗」は理想的国家への発展と民主主義の深化を願うソローの使命感に基づいた行動であり、現存政府と国家を理想的なものに改革しようとする彼の潜在自我の体現とみなすことができる。

「マサチューセッツ州の奴隷制」("Slavery in Massachusetts") は、1851 年 4 月 3 日にジョージア州の逃亡奴隷トマス・シムズ(Thomas Sims)がボストンで逮捕送還され、1854 年 5 月 24 日にはヴァージニア州の逃亡奴隷アンソニー・バーンズ(Anthony Burns)がボストンで逮捕送還される事件が発生したため、ソローが 1854 年 7 月 4 日に行なった講演である。彼が政治権力と対決した誘因は、自由州にいながら連邦政府に逮捕されて再び奴隷状態に戻されたバーンズ事件にあったが、同時に 1850 年に制定された「逃亡奴隷取締法」が奴隷制廃止運動の全戦線を恐怖に陥れたことにあった。

ソローはこの講演でバーンズ事件に触れた後、人権を蹂躙する合衆国政府と法律、道徳意識

が欠如したマサチューセッツ州知事、裁判官、奴隷所有者、新聞界、教会など殆どすべての社会制度を次々と弾劾した。この講演の意図は、道徳的高みから奴隷制を検討して、マサチューセッツ州の市民社会における人権だけでなく市民の義務としての道徳意識を覚醒させることにあった。連邦主義者エマスンとは異なって、ソローは合衆国憲法ではなくマサチューセッツ州憲法を行使する州権論者すなわち地方分権論者の立場から、不正な「逃亡奴隷取締法」と黒人を奴隷として人権を蹂躙する国家権力を否定し、それらの非合法性に対する市民の正義と勇気を覚醒させようとしたのである。

「マサチューセッツの奴隷制」は、ソローが道徳的良心に基づいた改革者精神によって黒人奴隷制を擁護する国家権力と徹底的に対決して社会変革を主張したものであり、従って民主主義の発展あるいは深化を願ったものである。この意味において、この講演は社会政治における改革者精神の顕在化であり、ソローの自己実現である。

合衆国政府あるいは州政府と市民社会に対する抵抗思想を説いて人権擁護が主張された「市民の反抗」や「マサチューセッツ州の奴隷制」と比べて、「ジョン･ブラウンの弁護」は正義と良心に基づいたブラウンの＜奴隷解放＞という偉業が力説されたものである。これはまた、建国理念に基づく＜自由と平等＞という民主主義の理想を掲げた国家であるにもかかわらず、奴隷制を容認し専制的な現存政府に対して＜法の下の自由と平等＞の実現を目指した講演である。更にまた、これは、奴隷制廃止を強く願ったソローが、ブラウンの奴隷解放のための偉業を同時代人に語り伝えて、＜人間の良心の法＞に基づき、人権を尊重する政府と市民社会、言わば民主政治の在るべき姿を追求して社会政治改革を試みた講演であったと言えよう。

## Ⅲ.『マヌ法典』、湖沼学研究、奴隷制廃止運動の実践の意義―東西思想の融合化、自然環境保護、民主主義の理想

### 1.　『マヌ法典』の実践の意義―東西思想の融合化

ソローはウパニシャット哲学の強い思想的影響を受けて、西洋的思惟とは異質の思考様式を用いて精神的に豊かな生き方を追求することができた。ウォルデン池畔で孤独に自我探求の簡素化と瞑想による神秘的な意識体験を経て、神認識に到達したソローは、それが自然に内在する神性と調和融合した自我に内在する神性を直観的に洞察するバラモンの深い意識経験と同一であると認識し、それ以後の経験と認識が彼自身の人生哲学の重要な構成要素になったと想定される。ウパニシャット哲学の実践に基づいた経験と認識がソローに思想的深化をもたらしていることはもはや疑問の余地もない。それは、自我探求のプロセスで自然に内在する神性を認識する内面的体験に基づいた思想的深化であった。

ソローの東洋的な経験と認識は、『マヌ法典』における生活規範を実践した自我探求に基づいたものであり、彼の超絶主義に実体を与えた。ソローは自我探求の過程における内面的経験すなわち直観的な神認識によって初めて同時代人に生活改善を示唆することができた。同時に、

ソローは『マヌ法典』の実践によって神との合一という人生の究極目的を達成して独自の超絶主義思想を『ウォルデン』で表明することができたため、散文作家としての地位を確立することができた。

独居生活以後でさえ、ソローが西洋的な物質主義ではなく自然との調和融合によって心に生ずる平穏を求める東洋的な深い生き方を実践したことは、(“To the philosopher all sects, all nations, are alike. I like Brahma, Hari, Buddha, the Great Spirit, as well as God.” 8, *Journal* 2:4)と書いた日記(1850 年 5 月 12 日)の記事が明らかに物語っている。この述懐は、ソローが東西思想の融合化によって辿り着いた究極的な境地である。

ソローが古今東西のイズムや思想を摂取して東洋思想と西洋思想の融合化を試みたことには、次のような 4 つの現代的意義がある。

第 1 に、ソローが物質主義による西洋文明の限界を悟り、その打開策を精神的内向性の強い東洋文明の叡知に求め、自然と文明を調和させて生きることの意味を示唆したところに大きな意義がある。このようなソローの生き方は、時空を越えて 21 世紀の文明社会に生きる我々に対しても示唆するところが多い。

第 2 に、ソローが洋の東西を問わず、すべての宗教は本質的には同一であり、すべての国民も同一であるという境地に辿り着いた。このような認識は、宗教的民族的な紛争が絶えない 21 世紀の国際社会に対して、人類の平和と共存的な生き方に一つの道標を示すものという意味で大きな意義がある。

第 3 に、ソローは自我探求の道を辿って、エマスンを凌駕する作家になるという自ら思い描いた夢・目標に向かって意識的かつ永続的な努力を重ね、『ウォルデン』を著述して散文作家の地位を確立することができた。ソローの自我探求の生き方と自己実現の達成は、我々に一種の希望と感動さえ与えてくれる。これは、ソローが西洋の物質主義・合理主義の限界を覚り、その打開策を考え方・生き方においても異質の文化としての東洋神秘主義・インド哲学に人間性探求の模範を求め、実践的な生き方・知のフロンティアとして我々に見本を示したという意味で大きな意義がある。

第 4 に、ソローはウパニシャット哲学を実践して究極の自己実現を達成した。それは、彼が崇高なものの存在を探求して自らの魂を高所まで高揚して人格的完成に到達することができたことを人々に示唆を与えたことは、この上なく素晴らしい印象を我々に与えてくれる。ソローの『マヌ法典』の実践は、この意味で真に意義深いと言える。

## 2.　湖沼学研究から生態学的意識の意義―自然環境保護

ウォルデン池畔で博物学及び湖沼学的研究を経て、自然の詳細かつ客観的事実を把握したソローは、ウパニシャット哲学における「自然界における一切の生物の平等関係」と「目には見えない至高の本質」を認識する経験によって自然を有機的組織体とみなし、＜自然界に存在する連鎖性＞・＜生態学的な意識＞を抱いて自然環境保護の思想に到った。

19 世紀中期アメリカ物質文明繁栄の時代に、博物学から湖沼学的研究を経て、生態学的な意識に到達したソローの自然環境保護の思想は、次代のジョン・バーローズ(John Burroughs, 1837-1921)やジョン・ミューア(John Muir,1838-1914)といった自然環境保護論者に受け継がれた。ソローの自然環境保護の思想は、21 世紀に生きる我々が今なお直面する産業活動による自然環境破壊や地球温暖化による気候変動と密接に関連する先駆的な研究であるという意味において現代的な意義がある。

ソローは自我と自然と神の探求を試み、自らの内面を映し出す鏡とみなしたウォルデン池を多面的に観察し、深く生きて立派な自画像を描こうとした。ウォルデン池畔は、ソローにとって、自然を友として簡素に生きて崇高なものの存在を探求して気高い生活ができる絶好の空間であった。ソローの自我は、自然から啓示を受けて神を受容する容器であったと解釈することができる。優れた芸術家や宗教家のなかには、人が神を受容する容器のような存在であるいうことは、多くの研究者が説くところである。自然の精神的効用としての人間性回復と人間性解放の思想を説いたソローが自ら魂の高所に到達したことは、我々に素晴らしい印象を与えてくれる。ソローは文学的かつ科学的な自然研究によって自然の存在意義を探り、19 世紀中期アメリカ物質文明による自然環境破壊に対して抗議しただけでなく、同時代人に自然環境の重要性を示唆して自然環境保護運動の先駆的な役割を果たしたと言えよう。ソローの博物学および湖沼学的研究に大きな意義があるのは、同時代人に対して自然環境保護の啓蒙活動をしたという意味においてである。

## 3. 奴隷制廃止運動の意義―民主主義の理想の追求

合衆国政府あるいは州政府と市民社会に対する奴隷制廃止論を説いて抵抗思想が主張された「市民の反抗」や「マサチューセッツ州の奴隷制」と比べて、「ジョン・ブラウンの弁護」は正義と良心に基づいたブラウンの＜奴隷解放＞という偉業が力説された人権擁護論である。これは、建国理念に基づく＜自由と平等＞という民主主義の理想を掲げた国家であるにもかかわらず、奴隷制を容認し専制的な現存政府に対して＜法の下の自由と平等＞の実現を目指した講演である。更にまた、これは、奴隷制廃止を強く願ったソローが、ブラウンの奴隷解放のための偉業を同時代人に語り伝えて、＜人間の良心の法＞に基づき、人権を尊重する政府と市民社会、言わば民主政治の在るべき姿を追求して社会政治改革を試みた講演であった。

ソローは州法の独立性を適用すべきだという地方分権論者の立場から、「マサチューセッツ州の奴隷制」で州法を施行しない州知事は無能であると非難した。実際には、州憲法は連邦の管轄下にあったため奴隷制に適用されなかった。重要なことは、連邦主義者エマスンに対して、ソローは地方分権論者であったという事実である。彼はマサチューセッツ州憲法が合衆国憲法に先行したという過去の歴史的事実を踏まえて、連

邦主義ではなく地方分権主義、すなわち州の独自性を尊重する州権論者の立場から奴隷制即時撤廃を表明した。マサチューセッツ州法が建国理念に基づき奴隷制を違法として成文化されたことを認識していたソローは、マサチューセッツ州憲法を行使することが奴隷制廃止を早期実現できるとみなしていた。従って、ソローの奴隷制廃止論は、連邦主義者エマスンの妥協的な主張と異なり、政治における法制度と市民社会に対する非妥協的かつ徹底的な改革論であった。このように、「マサチューセッツ州の奴隷制」は、ソローが自らの信念に基づき、州政府との非妥協的な対決を貫いて民主主義社会の在るべき姿を追求した講演であった。これはまた、神の下での自由と平等が掲げられたアメリカ建国理念を根拠として主張された奴隷制廃止論であり、アメリカ民主主義の発展と深化のために一石を投じた講演という意味で大きな意義がある。

「ジョン･ブラウンの弁護」の意義は、次のように要約できる。

第１に、ソローはブラウンを偉大な殉教者かつ英雄であるとみなし、国家反逆罪としてブラウンを処刑した不正な法律に基づいた合衆国政府および民主主義の在り方を批判した。第２に、ソローはブラウンの良心と正義に基づいた行動が国家よりも賢明な個人の偉業であり､建国の父祖や殉教者キリストの偉業に匹敵することを主張した。

第３に、ソローは政府･国家あるいは市民に対して＜市民法＞よりも＜道徳法＞を優先させ、国民である前に人間であるべきことを主張した。第４に、ソローは黒人問題が南北戦争を誘発するというブラウンの予言を語り伝え、同時代人にアメリカ民主主義の在るべき姿を認識すべきことを覚醒させようとした。

ソローが個人的な立場から民主主義の在り方を検討した「ジョン･ブラウンの弁護」は、歪曲されたブラウン像の修正だけに留まらず、この偉大な英雄の行動に普遍性が帯びていることを語り伝えたものであり、この意味で代弁者ソローにはブラウンと同様の預言者的、改革者的性格を認めることができる。この講演は、後世のガンディーの民族解放運動やキング牧師の公民権運動が実証するように、アメリカ民主主義と民主政治の発展と深化に貢献したという意味で極めて大きな意義がある。

## Ⅳ. ソローとコンコードの過去と現在

ソローは、コンコードの精神風土と数多くの人々の影響を受けて広範な思想的視野を培い、自然の中に身を置いて深く生きた。簡素化と孤独にして内省的な生き方から東西思想の融合化の実践、また博物学、湖沼学的研究から生態学的な意識を抱いて自然環境保護の重要性を同時代人に啓蒙し、メキシコ侵略戦争（1846-48)に端を発した合衆国政府に対する抵抗思想を経て、奴隷制廃止運動と真の民主主義の追求をウォルデン池畔の森で展開した。『ウォルデン・森の生活』は、ソロー自身の思索と行動に基づいた自己実現の生活報告書であり、現代に生きる我々に示唆するところが多い。

2010 年 8 月中旬から 9 月初旬にかけてカナダ経由でボストン及びコンコードを再訪した筆

者は、コンコードが自然の美しい景観だけでなく、エマスンやソローの時代に近い状態で、自然環境破壊や過剰の土地開発もない、街並みと歴史的建造物が大切に保存されていることに感銘を受けた。香り高い文化が漂う地域社会コンコードには、人間の自由と正義の理念が歴史的伝統として今なお確実に息づいていると思われた。ソローの没後 150 年になる 2012 年は、より多くの彼の偉業についての言及がなされるであろう。

## 凡例

1. Henry David Thoreau のテクストは、原則として *The Writings of Henry David Thoreau*, AMS first edition, 20 vols. (New York, 1968) を使用した。
2. 本文におけるソローのテクストのうち、括弧内引証の表記については、次のように示した。*The Writings of Henry David Thoreau II*,pp.45-46 は(2:45-46)とし、*The Writings of Henry David Thoreau VII*, p.120 は(7, Journal 1: 120) とした。

## 註

1. MAYO *Polit. Sk*. Washington, 1839. "The reader is enabled to appreciate the sacrifice I have made… in pursuing the phantom of Jacksonian-democracy." [*DA*]

## 文献一覧

ここに記した文献は、直接参考にしたものである。主要な作品の巻数と出版年は、本文に記載した。

Anderson, John Q. *The Liberating Gods*. Coral Gables, Florida: University of Miami Press, 1971.

Emerson, Ralph Waldo. *The Complete Works of Ralph W. Emerson I*. New York: AMS Press, 1961.

————. *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson II*. New York: AMS Press, 1968.

Hammond, Bray. "The Jacksonians, 1829-1841."*The American Past*. Ed. Sidney Fine, and Gerald. S. Brown. New York: Macmillan, 1970.

Harding, Walter. *A Thoreau Handbook*. New York: New York University Press,1982.

James, William. *The Varieties of Religious Experience*. Ed. Martin E. Marty. New York New York: Penguin, 1985.

Jefferson, Thomas. *Thomas Jefferson on Democracy*. Ed. Saul K. Padover. New York: D. Appleton Century, 1939.

Jung, Carl Gustav und Merker Lilly Jung, "Bewusstsein, Unbewusstes und Individuation," Gesammelte Werke Bd. 9. Olten: Walter, 1980.

Thoreau, Henry David. *The Writings of Henry David Thoreau II*. New York: AMS, 1968.

————. *The Writings of Henry David Thoreau IV*. New York: AMS Press, 1968.

————. *The Writings of Henry D. Thoreau Ⅶ* (*Journal 1*). New York: AMS Press, 1968

————. *The Writings of Henry David Thoreau Ⅷ* (*Journal 2*). New York: AMS Press, 1968.

長尾雅人編 『バラモン経典・原始仏典』 「バガヴァット ギーター」宇野惇訳 中央公論社 1969.

ルソー, ジャン・ジャック. 平岡昇編『ルソー』「社会契約論」井上幸治訳 中央公論社 1970.